

そう だい えいえん いのち
総 題 「永遠の命」

だいさん か にんげん ほんしつ し
第3課 人間の本質を知ること

さな だ おさむ
真田 治

いち あんそくにちごご
1. 安息日午後

こんしゅう ひと い い み ひと し い み せいしょ ことば
今週は、人が「生きる」とはどういう意味か、そして、人が「死ぬ」とはどういう意味かを、聖書の言葉から
まな
学びます。

に せんに じゅうねんさんがつにじゅうく にち しむら しんがた はいえん な しむら
2020年3月29日、タレントの志村けんさんが新型コロナの肺炎のため亡くなりました。志村けん
さんは、新型コロナで亡くなった、日本で53番目の人だそうです。

しむら けんさんが亡くなったと知って、わたし たちは、「コロナは本当に怖い病気だ」と思いました。53人と
いんずう し しむら な し わたし にんげん い し
いう人数を知るよりも、志村けんさんが亡くなったと知るほうが、私たちは人間が生きて、そして、死ぬこと
について、真剣に考えるようになりました。1人の人の死によって、生きることと死ぬことについて、私たちは真剣
かんが
に考えるようになったのです。

こんしゅう わたし ひと い し せいしょ ことば まな
今週、私たちは、人が「生きる」ことについて、そして「死ぬ」ことについて、聖書の言葉から学びます。
ひとびと い し かんが たいせつ たいせつ ひとり ひと い
たくさんの人々が生きて死ぬことについて考えることも、大切です。しかし、あなたの大切な1人の人が生きて
し かんが たいせつ じしん い し かんが
死ぬことについて考えることは、もっと大切です。そして、あなた自身が生きて死ぬことについて考えることも、
たいせつ こんしゅう じしん たいせつ ひとり ひと しんけん まな
大切です。今週、あなた自身のために、そして、あなたの大切な1人の人のために、真剣に学んでいただきたい
です。

に にちようび い もの
2. 日曜日：「生きる者」

そうせいきにしょうななせつ よ こんしゅう あんしょうせいぐ せいしよきょうかいきょうどうやく ほんやく
創世記2章7節を読みましょう。今週の暗唱聖句ですね。「聖書協会共同訳」という翻訳です。
かみ しゅ つち ちり ひと かたち はな いのち いき ふ ひと い もの
「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となっ
た。」

そうせいきにしょうななせつ か ひと なまえ かみ いのち いき ふ こ まえ
創世記2章7節に書いてある人は、アダムという名前です。アダムに神さまが命の息を吹き込まれる前から、
からだ かたち い もの いのち いき からだ ふ こ あと
アダムの体の形は、ありました。しかし、アダムが「生きる者」になったのは、命の息が体に吹き込まれた後
いのち いき からだ あ い もの
のことです。「命の息」と体が合わさって、アダムは「生きる者」になりました。

かみ からだ ふ こ いのち いき たましい からだ べつ
神さまがアダムの体に吹き込まれたのは「命の息」であって、「アダムの魂」ではありません。体とは別
たましい からだ かたち いのち いき
のところアダムの魂があったわけではありません。体の形だけでは、アダムではありません。命の息だけ
いのち いき からだ あ
でも、アダムではありません。命の息と体が合わさって、アダムになったのです。

わたし ひと い もの り ゆう かみ かたち からだ かみ あた
私たちが人として生きる者である理由は、神さまによって形づくられた体に、神さまによって与えられた
いのち いき からだ かみ かたち
命の息があるからです。あなたの体を、神さまは形づくってくださいました。あなたの体に、神さまは命の
いき あた ひと い もの り ゆう かみ かたち からだ かみ
息を与えてくださいました。あなたが人として生きる者である理由は、神さまによって形づくられた体に神さ
まによって与えられた命の息があるからです。あなたの体とは別のところに「あなたの魂」があるのではあり
ません。あなたは、神さまによって形づくられた体と神さまによって与えられた命の息が合わさって、あなた
せかい ひとり ひとびと たいせつ かみ ひとり
です。あなたは、世界に1人だけのあなたです。たくさんの人々を大切にしてくださる神さまは、あなた1人のこと
も、いつも大切にしてくださっています。

3. 月曜日：「罪を犯した魂は必ず死ぬ」

かみ かたち からだ かみ あた いのち いき ひと い もの
神さまによって形づくられた体に神さまによって与えられた命の息があるから、人は生きる者であると、
にちようび き のう まな ひと からだ べつ ひと たましい からだ たましい
日曜日の昨日、学びました。人の体とは別のところに、人の魂だけがあるわけではありません。体と魂とが
あ ひと い もの
合わさって、人は生きる者なのです。

ひと し からだ たましい あ ひと し からだ し あと たましい べつ い
だから人が死ぬときも、体と魂が合わさった人が死にます。体が死んだ後でも魂だけが別のところで生
きるわけではありません。

しよじゅうはっしょうよんせつ じゅうはっしょうにじゅうせつ つみ おか たましい かなら し か ひと
エゼキエル書 1 8 章 4 節や 1 8 章 2 0 節には、「罪を犯した魂は必ず死ぬ」と書いてあります。人
が死ぬときは、からだ たましい あ ひと し
体と魂が合わさった人として死にます。

わたし し こわ わたし し だいじょうぶ かみ やくそく
私たちは死ぬのが怖いです。私たちは死にたくありません。しかし大丈夫です。神さまは約束してくださ
いました。ローマ書 6 章 2 3 節を読んでみましょう。

つみ しはら ほうしゅう し かみ たまもの しゅ えいえん いのち
「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なので
す。」

しよろくしょうにじゅうさんせつ か ほうしゅう たまもの かんが ほうしゅう あ まえ あた
ローマ書 6 章 2 3 節に書いてある報酬と賜物について考えましょう。報酬とは、当たり前で与えら
れるものという意味です。だから、「罪が支払う報酬は死です」とは「罪を犯した人が死ぬのは当たり前です」と
いう意味になります。

いっぽう たまもの とくべつ あた い み かみ たまもの しゅ
一方の賜物は、特別に与えられるプレゼントという意味です。だから「神の賜物は、わたしたちの主キリス
ト・イエスによる永遠の命なのです」とは、「特別なプレゼントとして神さまは永遠の命を与えてくださまし
た」という意味になります。死ぬのが当たりの私たちの代わりに主キリスト・イエスが十字架で死んでくださっ
たから、私たちには永遠の命が特別にプレゼントされたのです。

わたし からだ たましい あ ひと えいえん いのち い もの
私たちは体と魂とが合わさった人として、永遠の命を生きる者なのです。

4. 火曜日：「霊は与え主である神に帰る」

こんしゅう あんしょうせいく そうせいきにしょうなせつ よ せいしよきょうかいきょうどうやく ほんやく
今週の暗唱聖句、創世記 2 章 7 節を読みましょう。「聖書協会共同訳」という翻訳です。

かみ しゅ つち ちり ひと かたち はな いのち いき ふ こ ひと い もの
「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となっ
た。」

そうせいきにしょうななせつ か
創世記2章7節に書いてある「息」という言葉には、「霊」とか「魂」とかいう意味もあります。

それから、コヘレトの言葉(伝道の手紙) 12章7節を読みましょう。

「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。」

次に、コヘレトの言葉(伝道の手紙) 12章7節を、「聖書協会共同訳」という翻訳で読んでみましょう。

「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。」

「息」という言葉と「霊」という言葉が、同じような意味で使われていますね。

人が死ぬときは、体と魂が合わさった人が死にます。死んだ後の人は、無意識になります。死んだ後は、苦しみも悲しみも痛みも、すべて消え去ります。しかし、死んだ人のことを、神さまは忘れないで覚えておられます。人が生きる者となるために命の息を吹き込まれた神さまの元に、死んだ人の命の息は帰ります。元々神さまから与えられた命の息は、人が死んだ後は、神さまに帰るのです。

主イエスさまを信じて死んだ人は、主イエスさまが再臨なさるとき、新しい命を与えられて復活します。

神さまは人を復活させるため、ひとりひとりの死んだ人を忘れないで覚えておられます。

あなたがもしも死んだら、あなたは無意識になります。あなたが死んだ後は、苦しみも悲しみも痛みも消え去ります。しかし神さまは、あなたが死んでもあなたを忘れません。神さまはあなたを永遠に覚えてくださっています。あなたが生きる者となるために与えられた命の息は、あなたが死ぬときに神さまの元に帰りますが、主イエスさまの再臨のとき、新しくされた永遠の命の息を神さまはあなたに与えてくださるのです。

5. 水曜日：「死者はもう何ひとつ知らない」

コヘレトの言葉(伝道の手紙) 9章5節には、「死者はもう何ひとつ知らない」と書いてあります。そしてコヘレトの言葉(伝道の手紙) 9章10節には、「いつかは行かなければならないあの陰府には仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」と書いてあります。

昨日の火曜日に、死んだ人は無意識であると学びました。死んだ人にとっては、苦しみも悲しみも痛みも、仕事も企ても、知恵も知識も、すべて消え去っているのです。しかし神さまは死んだ人のことを忘れることなく、再臨のときに復活させてくださると、学びました。

今日は、コヘレトの言葉(伝道の手紙) 9章10節に書いてある「陰府」という言葉について考えましょう。

陰府とは、死者の状態のことです。マタイ福音書11章23節には「陰府にまで落とされる」という表現があります。「陰府に落とされる」と書いてあるので、陰府とは死者を苦しませ続ける場所だと勘違いしている方がいらっしゃいますが、しかし、陰府とは、死者を苦しませ続ける地獄ではありません。なぜなら陰府には知恵も知識もなく、死者はもう何ひとつ知らないからです。「陰府にまで落とされる」とは、死んだ人が無意識の状態の眠りに落ちることです。

陰府と似たような言葉で、地獄という言葉も聖書に書いてあります。主イエスさまは、マタイ福音書10章28節で、「魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」と言っておられます。地獄は滅ぼす場所だと教えておられるのです。地獄は、苦しめることが目的ではなく滅ぼすための場所です。苦しみも悲しみも痛み

も、^{つみ}罪も、^{ほろ}滅びます。

^{つみ}罪をゆるしてくださる^{しゅ}主イエスを^{しん}信じない人は、^{ひと}罪と^{つみ}一緒に^{いっしょ}魂^{たましい}も^{からだ}体も^{ほろ}滅ぼされます。しかし、^{つみ}罪をゆるしてくださる^{しゅ}主イエスを^{しん}信じる人は、^{ひと}罪だけが^{つみ}滅び、^{ほろ}イエスさまの^{さいりん}再臨のときに^{つみ}罪がない人として^{ふつつ}復活します。「^{ほろ}滅ぼすことができる方^{かた}を^{おそ}恐れなさい」とは、^{ほろ}滅ぼす力^{ちから}と^{すく}救う力^{ちから}の^{りようほう}両方を^{しん}持っているイエスさまを^い信じなさいという意味です。

^{しん}イエスさまを^し信じて^{ひと}死んだ人も^{しん}イエスさまを^し信じないで^{ひと}死んだ人も、^し死んだ後、^{あと}いったん^{よみ}陰府の^{じょうたい}状態で^{ねむ}眠ります。

^{しん}イエスさまを^{ひと}信じた人は、^{さいりん}イエスさまの^{よみ}再臨のときに^{ふつつ}陰府から^{てんごく}復活して^あ天国に^あ挙げられます。しかし、^{しん}イエスさまを^{ひと}信じない人は、^{さいりん}イエスさまの^{あと}再臨の後の^{せんねんき}千年期の^{さいご}最後に、^{よみ}陰府から^{ふつつ}復活して、^{しん}イエスさまを^し信じなかったことを^{こうかい}後悔しながら、^{かんぜん}完全に^{ほろ}滅ぼされます。^{てんごく}天国で^{すく}救われるためには、^よこの^い世で^{あいだ}生きている^{しゅ}間に^{しん}主イエスさまを^し信じなくてはなりません。^しイエスさまは「^し死と^{よみ}陰府の^{かぎ}鍵を^も持っておられる」^{おかた}御方です（^{もくしろく}黙示録^{いっしょうじゅう}1章^{はちせつ}18節）。^し死んだ後で^{あと}陰府に^{よみ}眠っていても、^{ねむ}主イエスさまを^{しゅ}信じて^{しん}眠りに^{ねむ}ついた人は、^{ひと}天国へと^{てんごく}救い^{すく}出してもらうために^だ陰府の^{よみ}鍵^{かぎ}を開けてもらえるのです。

ろく もくようび ^{せんぞ}先祖たちと共に^{とも}眠りに^{ねむ}つく

^{そうせい}創世記²5章^{はつせつ}8節には、^しアブラハムが^{せんぞ}死んで「^{れつ}先祖の^{くわ}列に^か加えられた」と書いてあります。

^{きげ}サムエル記下^{ななしょうじゅう}7章^{にせつ}12節には、「^{しょうがい}あなたが^お生涯を終え、^{せんぞ}先祖と共に^{とも}眠るとき」と書いてあります。

^{れつおう}列王記上^{きじょうにしょうじゅう}2章^{にせつ}10節には、^しダビデが^{せんぞ}死んで「^{とも}先祖と共に^{ねむ}眠りに^かつき」と書いてあります。

^{ひと}人が^し死ぬと「^{せんぞ}先祖」と呼ばれるようになります。^{きゅうやくせいしよ}旧約聖書の時代の^{じだい}昔に^{むかし}死んだ人も^し去年お亡くなりになつた人も、^{ひと}死んだ後は^{あと}平等に^{びょうどう}「先祖」です。^{せんぞ}神さまや^{しゅ}主イエスさまを^{しん}信じて^し死んだ先祖は、^{しん}主イエスさまの^{さいりん}再臨のとき、^{びょうどう}だれでも^{ふつつ}平等に^{てんごく}復活して、^あ天国に^{かみ}挙げてもらえます。しかし、^{しゅ}神さまや^{しん}主イエスさまを^し信じないで^し死んだ先祖は、^{せんぞ}イエスさまの^{さいりん}再臨の後の^{あと}千年期の^{せんねんき}最後に、^{さいご}だれでも^{びょうどう}平等に^{たんきかん}短期間だけ^{ふつつ}復活して、^{しん}信じなかったことを^{こうかい}後悔しながら^{ほろ}滅ぼされます。

^{すく}救われるか^{すく}救われないかの^{じょうけん}条件は、^{びょうどう}だれでも^{ふつつ}平等なのです。

^{たいせつ}あなたの大切な人が^{ひと}死んで「^{せんぞ}先祖」と呼ばれるようになる前に、^{まえ}あなたの大切な人が^{しゅ}主イエスさまを^{しん}信じるよう、^{すす}勧めましょう。

なな きんようび ^{けんきゅう}金曜日：さらなる研究

^{ふくいんしよじゅう}マルコ福音書¹2章^{にしょうじゅう}18～^よ27節を^よ読みましょう。

^{ふつつ}復活はないと言っている^いサドカイ派の^は人々が、^きイエスのところへ^{たず}来て^{せんせい}尋ねた。「^{せんせい}先生、^しモーセはわたしたちの^{ため}に書いています。『ある人の^{ひと}兄が^{あに}死に、^し妻を^{つま}後に残して^{あと}子がない場合、その^{この}弟は^こ兄嫁と^{ばあい}結婚して、^{おとうと}兄の^{あによめ}跡継ぎを^{けっこん}もうけねばならない』と。ところで、^{あに}七人の^{あとつ}兄弟が^{のこ}いました。長男が^{しちにん}妻を迎えましたが、^{きょうだい}跡継ぎを^{ちやうなん}残さな^{つま}いで^{むか}死にました。次男が^{あとつ}その^{のこ}女を^し妻に^{さんなん}しましたが、^{どうよう}跡継ぎを^{しち}残さな^しいで^し死に、^し三男も^{さんなん}同様でした。こうして、^七七人とも^{にん}跡継ぎを^{あとつ}残しませんでした。最後に^{のこ}その^{さいご}女も^{おんな}死に^しました。復活の時、^{ふつつ}彼らが^{とき}復活すると、^{かた}その^{ふつつ}女は^{おんな}だれ

の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」

マルコ福音書 12章 18～27節でサドカイ派の人々が言いたかったことは、「復活はない」、「天国はない」ということです。対するイエスさまが言いたかったことは、「復活はある」、「天国もある」ということです。

夫が死んだために再婚し、複数の男性と結婚したことがある女性のことをサドカイ派の人々は例に出し、「もしも復活や天国があるんだったら、天国は、1人の妻に複数の男性が夫になる、不健全な場所なんですか？ 結局は、復活も天国も、ないのではないですか？」と言いたかったのです。サドカイ派の人々からの挑戦に答えて、イエスさまは、「死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」と言われました。「天国には結婚というものはないのだから、この世で複数の人と結婚したことがある人でも、安心して天国に入れる」という意味でしょうか。そして、イエスさまは、「モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」と言われたのです。

モーセの時代、アブラハムもイサクもヤコブも、もう死んでいました。神さまは、もう死んだ後の人のことをも、忘れないで覚えておられます。なぜなら、主イエスさまの再臨のときに復活させて、また天国で会うことができるからです。もしも死んだ人が復活しないのだったら、死んだら終わりですから、死んだ人のことを覚えておく必要はありません。神さまは、アブラハムのこともイサクのこともヤコブのことも、必ず復活させる。だから、忘れないで覚えておられるのです。神さまは、「死んだ者の神ではなく、生きている者の神」です。人間の記憶では、アブラハムのこともイサクのこともヤコブのことも、忘れることがあります。しかし神さまの記憶では、アブラハムのこともイサクのこともヤコブのことも、忘れることはありません。もう死んで無意識の状態にあるアブラハムのこともイサクのこともヤコブのことも、神さまは記憶の中で、まるで生きているかのように覚えておられます。なぜなら神さまは永遠の御方であり、永遠の神さまにとって、すでに死んだ過去の人のことや、将来の復活や天国のことも、まるで現在のことのよう考えることがおできになるのです。

E・G・ホワイトは『各時代の希望』という本の第6章で、「死んだ者は神に生きるのである」と書いています。

三育学院カレッジ神学科の校長だった高橋義文先生は、『憶えられていることを覚えよ』というエッセーで、「死とは、『神の記憶』のなかへと入っていくことではないか」と書いています。E・G・ホワイトが書いていることも高橋義文先生が書いていることも同じ意味ではないかと、私は思います。

死は、悲しいことです。死は、怖いものです。しかし、死んだ人のことを忘れないで覚えてくださる神さまを信じるならば、「生きる」ことにも「死ぬ」ことにも希望があると分かります。あなた自身が救われ、あなたの大切な

ひと すく 人も救われるために、主イエス・キリストを信じ、伝える人になってください。あなたと、あなたの大切な人を、
かみ 神さまがたくさん 祝福してくださいように。

※1不健全な：人の道から外れて乱れている